美醜逆転した世界に転がり落ちたら愛が重いイケメンたちに囲われました

characters

リオ

大衆食堂「ライライ」で働く店員。
カオルにとって初めてできた友達だが、
友達じゃできないこともシちゃったり……？

ディラン

冒険者ギルド「アトラース」のギルドマスター。
食堂で相席をしているうち、カオルに惹かれていく。
大人の色気がある寡黙な男。

ギルバート

Sランク冒険者。まん丸ボディで、この世界での「美形」。
カオルをパーティの男娼にしようと執拗に言い寄ってくる。



アルク

ナリス国の騎士団長。
純情童貞だったが、カオルを買って無事脱☆童貞を果たす。パトロンとなり、カオルを独占しようとする。

バルド

冒険者ギルド「アトラース」の冒険者。
面倒見がよく頼りがいのある男だが、カオルからの誘惑に負けがち。

カオル

土手から転がり落ちたら、美醜の価値観が逆転した異世界に転移していた。平凡な顔立ちだが、この世界では美少年らしい。
快楽に弱く、流されているうちにフリーの娼夫として客を取るようになる。ポジティブ思考。

クリストファー

ナリス国の第一王子。愛称クリス。
その「醜い」容姿から孤独に生きてきたが、カオルが受け入れてくれたことで独占欲が爆発。カオルを監禁し孕ませようとする。

第一章　ある日森の中、イケメンに出会った

「薫は私より小さいから……ごめんね」
「薫くんちょっと痩せすぎかな。私はもっと体格がよくて筋肉がある人がいいな」
「薫っちは～顔が薄っぺらいから私と一緒にいると存在なくない？」

『チビ、ガリ、薄っぺら』
好きな子たちから振られる時の合言葉。
そりゃあ、平均よりも少し身長は低くて、筋肉が付きにくい体質で、特徴があまりない顔をしているけれど、人は見た目だけではないと俺は思う。大いに思っている。
ネットで検索しても人は外見じゃない、中身だって言っている。コメントだってそれに賛同するものばかりだ。
それなのに、なぜ……なぜ俺の隣に女の子がいないんだ！
大学に入って新人歓迎会に参加した時も俺だけ相手がいないし、同級生にコンパに誘われた時も

一人ぼっち。

そして、マッチングアプリでいい感じだった女の子にも「思ったよりも小さくて驚いた」と言われ、奢らされるだけ奢らされる始末。

「うぅ……俺が何したって言うんだよぉ」

やけくそになって自転車で土手沿いを走り抜ける。満月の夜、夜風が気持ちいい……なんて、傷心に浸っていたらタイヤが草を巻き込んでハンドルをとられ、真っ暗な土手を転げ落ちてしまう。

もう、何もかもが最悪だ。こんな理不尽な世の中なんて……大嫌いだ！

やけになった俺はどうにでもなれと思いながら、土手を転がり落ちた。

……あれ、えらく長いこと落ちるな。そんなに高い土手だったっけ？

閉じていた目を開けると、夜空には大きな満月が浮かんでいる。起き上がって辺りを見渡すと、鬱蒼（うっそう）とした木に囲まれていた。

「俺……土手沿いを自転車で走ってたよな？」

近くを見渡すが自転車はないし、前カゴに入れていた荷物もない。スマホも財布も全部カバンに入れていたので慌てて辺りを探したが何も見つからなかった。

「え、ちょっと待って。俺、もしかして落ちた衝撃で頭打っておかしな夢でも見てる？」

自分の頬を引っ張るが、普通に痛いし、転がり落ちて擦りむいた肘（ひじ）も今になって痛みだす。

痛いということは現実で、つまり俺は……

「時空の狭間（はざま）に落ちてしまったのか……って、漫画みたいなことないない……ハハ……」

自分にそう言い聞かせながら、緩やかな坂を登っていく。なんだか、どんどん森の奥に入っている感覚になったが、きっと気のせいだ。もうしばらくしたら土手沿いに辿り着くはずだ。

そう願いながら長いこと歩いて行くが、木々はさらに鬱蒼として月明かりを遮る。先が見えない暗闇を目の前にして、気力がなくなった俺はへたり込んでしまう。

「マジ、冗談きついって……」

大きくため息をつき諦めかけたその時、茂みを揺らす音とチラチラと揺れる淡い光が見えた。音の方へ視線を向けると暗闇の中にボウッと人影が見えた。

その人影は大きく、シルエット的に男性のようだ。助かったと思って駆け寄ると、男性の持っていたランプの光がハッキリと見えるようになった。

そして、男性の姿も見えたのだが……デカい。俺がこれまで出会ってきた中で一番デカい人だ。

人に会うとすぐに身長を比べてしまうのは悪い癖だが、この人は本当に身長が高い。推定……百九十センチといったところか。いや、底が厚いロングブーツを履いているから、それを加味すると……って、なんでロングブーツ？　今ってロングブーツ流行ってんの？

そんな疑問を持ちながら男性の前までやってくる。下から上へ視線を上げると、ランプに照らされ爛々（らんらん）と光る黄金色の瞳と目があった。ランプの光加減によるものなのか、その顔立ちはとても彫りが深く、日本人ではなさそうだ。そして、とてもイケメンだ。ハリウッド映画に出てくるレベルのイケメンだ。

あまりのイケメンぶりに後退ると、男性も後退り背を向けて森の中へ戻っていってしまう。
俺は慌てて男性に声をかける。
「あ、あの……！　待って下さい！　ストップ！　ストップ！」
やっと出会えた人を逃したくなくて必死に声をかける。外国人のようだったので英語も混ぜて声をかけると、男性は止まってくれたので慌てて駆け寄る。
「あの……あ、えーっと……どぅーゆーすぴーくじゃぱにーず？」
俺が最大限の英語力で話しかけると、男性は少しだけ振り向いてくれる。
「君は私の顔を見ても……恐ろしくないのか？」
「え？　恐ろしい？」
俺は改めて男性をマジマジと見るが、特に怖い感じはしない。イケメンだとは思う。それよりも日本語を喋れることがとても嬉しい。
「お兄さんは恐ろしくないですよ。日本語分かるんですね！　あぁーよかった。ん？　でも、土手沿いにこんな森みたいな場所あったっけ……？」
俺がぶつぶつ独り言を言っていると、男性も目を輝かせてぶつぶつと独り言を呟き出す。
「私が恐ろしくない。そうか……ふふ。恐ろしくない……恐ろしくないか……」
「……え？　大、丈夫ですか？」
男性に問いかけると満面の笑みを返される。
前言撤回。なんか怖い人かも。

若干男性と距離を保ちつつ、ここがどこか尋ねてみる。
「ここはどこか分かりますか？　俺、気がついたらここにいて……」
「ここはバリスの森。王都から西に進んだところにある森だよ」
――……バリスの、森？　オウト？
聞き慣れない名前に困惑する俺を男性は心配そうに見つめてくる。
「え、オウトってどこの地域ですか？」
「王都は王都だよ。ナリス国の」
「ナリス……国。ここは日本じゃ、ない？」
「ニホン？　……初めて聞く名前だね」
――う、嘘だ。本当に時空の狭間に転がり落ちて異世界転生しちゃったのかよ……
ショックのあまり立ち尽くしていると男性が手を差しのべてくる。
「とりあえず私の家においで。この周辺は獣も出るから。家で話を聞くよ」
なんて優しい人なんだろうか。どこの奴かも分からないのに助けてくれるなんて。
怖い人なんて思ってごめんなさいと、心の中で謝りながら男性の手をとった。
男性に連れられて歩くこと三十分。立派なログハウスに到着する。
初めて見るログハウスを見上げていると家の中へ案内される。北欧風の広いリビングに暖炉というオシャレな部屋だ。
やはりイケメンは部屋までおしゃれなのかと感心してしまう。

「ソファに座ってて。お茶持ってくるね」
「あ、すみません」
ふかふかのソファに座って待っていると、温かい紅茶が出てくる。甘い紅茶の香りに心が少し落ち着く。男性は俺の横に座り自己紹介をしてくれる。
「私の名前はクリス。君の名前は？」
「薫です。有村薫」
「カオルか……この辺りではあまり聞かない名前だね。見た目もここの土地の者ではなさそうだし……」
「俺、『日本』って国に住んでたんです。家に帰ろうとしたら土手から落ちて、気付いた時にはこの森にいて……」
「……そうか。一人で見知らぬ場所にいたのは怖かったな。しかし、さっきも言ったけれど『ニホン』という地名は聞いたことがないな」
「そう、ですか……」
日本を知らないと言われなんだか泣きそうになる。
本当に異世界に来てしまったのだと思うと、日本に帰る方法はあるのか、父さんが心配しているだろうとか不安が強くなる。
無言で俯く俺の手にクリスさんの手が重なる。クリスさんに視線を向けると、ハッとした顔をして、手を離した。

「すまない……カオルが不安そうに見えて……。私に触られるなんてイヤだよな」
「嫌なんかじゃないです。むしろ気を遣わせてしまってすみません」
申し訳ないと微笑むとクリスさんは何故か目を逸らす。なんだか少し気まずい空気が流れる。
俺はそっと目線を窓へと向ける。森の奥は真っ暗闇が広がっている。
日本に戻れないことも不安だが、今この状況についても心配しなければならない。
今日は泊めてもらえるんだろうか？
いや、俺なら身元不詳な人物を泊めたりなんかしないな。でも、野宿はマジで無理だ。
ここは土下座覚悟でお願いしてみないと……
「クリスさん……初対面の人にこんなことをお願いするのもなんですが、一日だけでいいので泊めていただけませんか？　お願いします！」
俺は立ち上がり頭を下げる。
見ず知らずの男を家に置くなんていやだろうが、頼むから断らないでほしい。
神様仏様クリス様お願いしますぅ……
クリスさんの返事が返ってくるまで、俺は日本人の特技の一つでもある『とりあえず神頼み』を発動する。
クリスさんは少し間をあけて、柔らかく微笑む。
「カオルがいいのなら、私は構わないよ」
「ほんとですか！　ありがとうございます！」

クリスさんは漫画に出てくるようなキラキラした王子スマイルを俺に向けてくる。
顔よし、性格よし、こんな人に拾ってもらえて本当によかった。
「困っているカオルを突き放すことなんてしないよ。しかし、カオルに説明しておかないといけないことがあるんだ」
「なんですか？」
「実はこの家は森の奥深くに建っていて、周りには危険な生物や獣が生息しているんだ。だから、一人で外に出ちゃいけないよ」
「そ、そうなんだ……。はい、分かりました！」
クリスさんの言葉に、あのまま森にいたら……と、想像して身震いしてしまう。
では、家に戻る方法を探しに行くのは夜が明けてからがいいだろうか。
「クリスさん、一つ質問なんですが……この森を抜けるにはどれくらい時間がかかりますか？」
俺の質問にクリスさんの表情が曇る。
「さっきも言ったように、ここは森の奥地だ。危険な獣たちを対処しながらとなると……訓練を積んだ兵士で一週間。民間人はその倍以上はかかるだろう。そもそも、無事に森から出れるかさえも分からない」
「そんな……」
クリスさんの言葉に俺は絶望する。
「じゃあ、ここからずっと出られないんですか……？」

「不定期だが、ここに物資を積んだ国の馬車が訪れる。それまで待った方がいい」
「馬車……その馬車はいつ来るんですか？」
「それが分からないんだよ。最近来たばかりだから、数か月は来ないと思う。それまで私と一緒にここで暮らしていくことになるが……無理にとは言わないよ」
見ず知らずの土地に来てここから先に進めないとなると、日本へ帰る手掛かりを探すことができない。
だけど死んでしまったらそこで終わり。
ここはクリスさんに従った方がいいよな。
「俺、何も持ってないし、できることも少ないですけど、馬車が来るまでここに住まわせてほしいです。お願いします」
「うん、もちろん大丈夫だよ。カオル、よろしくね」
笑顔で俺のことを受け入れてくれるクリスさんの背後から後光が見える。
「それじゃあ、一緒に過ごすのだから敬語も使わなくていいよ」
「え……それは……」
「じゃあ、敬語を使わないのがここに住む条件かな」
いたずらっ子のように微笑むクリスさんはやっぱりイケメンで、俺は微笑みながら頷いた。
それからクリスは家の中を案内してくれる。大きなリビングの隣にはクリスの寝室があり、その隣には空き部屋があった。

そこを俺の部屋として使っていいと言われる。
ベッドと机と椅子があるシンプルな部屋で、こぢんまりした感じがとても居心地がいい。
満面の笑みで感謝を告げると、クリスは少し恥ずかしそうに微笑んだ。
「じゃあ、私は夕食の準備をしてくるからカオルは少し休んでいるといいよ」
「俺も手伝います」
「カオル、敬語になってる」
「あ。……えっと、俺も手伝う」
年上にタメ口を使うのは慣れないなと思いながら敬語を訂正しつつ、クリスと一緒にキッチンへと向かう。
なかなかに立派なキッチンはリビングを見渡せる対面式キッチンだ。
「カオルは嫌いな物ある？」
「いや、特には。でも、ここの食材がどんなのか分からないからなんとも言えないかも……」
だいたい何でも食べられるが、虫とかは無理だ。最近ＴＶで見た昆虫食を思い出し、背筋がゾクリとした。
「野菜はこんなのを使うんだが……どうかな？」
目の前に出されたのはジャガイモとニンジンと玉ねぎだった。
「俺の国で使っているのと同じだ！」
「そうか、よかった。あとは、今日狩ってきた鶏（にわとり）を使おうと思うけど、お肉も大丈夫？」

「うん。俺、肉好き！」
笑顔を浮かべるとクリスも微笑んでくれる。
「まずは何をしたらいい？」
「カオルは料理できるのかい？」
「うん。俺は父親しかいなかったから、仕事でいない時は自分でご飯作ってたんだ」
「そうなんだ。じゃあ、皮剥きを手伝ってもらおうかな」
それからクリスと一緒に夕食を作り、鶏肉のソテーと野菜のスープができ上がった。
「さぁ、食べよう」
「うん。いただきます」
俺は食事の挨拶をしてから鶏肉のソテーを頬張る。
半日以上何も食べていなかったので腹ペコだったこともあり、鶏肉は今まで食べた中でも一番美味く感じた。
スープも、クリスがブイヨンみたいな物を入れていたので日本で飲む味に近い。
「うまーい！」
「それはよかった」
がっつく俺とは対照的にクリスは品よくスプーンを口元に運んでいく。
その姿はとても優雅で綺麗で、イケメンの食事風景はこんなにも素敵なのかと乙女のような感想が浮かぶ。

そして、あっという間に食事を平らげた後は片付けも一緒に済ませる。
「カオルは入浴はする？　この家にも風呂はついているんだが」
「え？　風呂まであるの！　できれば入りたいかな……」
「そうか。なら準備してこよう」
こんな山奥で風呂に入れるなんて最高すぎる。森の中を歩き回ってベタつく体のまま寝るのは少し憂鬱に思ってたから嬉しさ倍増だ。
でも、ここまで水道が繋がってるのか？
キッチンの蛇口から水が出てたし……
そんなことを考えていると風呂の準備ができたと言われ、風呂場へと向かう。
浴室には足まで伸ばせる浴槽と、洗い場にはシャワーまで付いていた。
「おぉ……」
思っていた以上に広々とした風呂に俺は歓喜する。てか、俺の実家の風呂より広い。
「じゃあ入ろうか」
クリスはそう言うと脱衣所で服を脱ぎ出す。
「え？　一緒に……入るの？」
「そうだよ？　カオルの世界では一緒に入らないの？」
「いや……一緒に入る場合もあるけど……」
「じゃあ、大丈夫だね」

ほら脱いで脱いでとクリスに急かされ、俺も仕方なく服を脱いでいく。
クリスは着痩せタイプだったのか、脱ぐと筋肉凄い系だった。
羨ましいほどの筋肉がとても男らしい。
それに比べて白くて貧弱な俺の体よ……
クリスはクリスで、俺の体をじっと見てくる。時折かなり凝視されるが……癖なのだろうか？
そんなクリスを見上げると、俺の視線に気がついたのか急に顔を赤くする。
「ご、ごめん……見すぎだよな……」
「ははっ。別にいいよ。俺もクリスの体を見てたし、おあいこだね」
笑いかけるとクリスは照れたような表情を浮かべる。
「クリス、早く風呂入ろう！」
「あぁ、そうだね」
浴室に入り、まずは体を洗おうと洗い場の方へと向かう。シャワーを浴びて体を洗おうとするとクリスに止められる。
「カオルちょっと待って。私が洗うから」
「へ？」
持っていたタオルをクリスに奪われ、背中を洗われる。
「ちょ！　ちょっとクリス！　自分で洗うから！」
「ダメだよ。この世界では、一緒に入浴して互いに体を洗い合うのがルールなんだよ」

そうしてクリスに背中・腕・腰と次々に洗われていく……
「ほら前の方も……」
胸や腹も優しく泡で包み込まれるように洗われていくが、恥ずかしさで爆発しそうだった。そうするうちにクリスの手は俺の大事なところまで伸びていき……
「ダメ！　ここはダメ！　俺がする！」
「うーん……じゃあ、今日は見逃してあげるけど次は洗うからね」
必死に抵抗する俺に、クリスは少しいじけた表情で諦めてくれたが……これからずっとこれなのか？
俺はタオルを返してもらい、自分で残りの部分を洗っていく。
――この世界のルールでいくなら……クリスの体は俺が洗うのかな？
チラリとクリスを見ると、俺の言いたいことが分かったのかクスっと笑われる。
「私も洗ってほしいけれどカオルができる範囲でいいよ」
クリスにそう言われて、あからさまにホッとしてしまう。タオルを受け取って、背中や腕などを洗っていきできないところは自分で洗ってもらった。
「ありがとう、カオル」
半分も洗っていないのに笑顔でお礼を言われると、少し申し訳なく感じてしまう。
「じゃあ、お湯に浸かろう」
足を伸ばせるくらいの浴槽だったので、互いに向かい合って湯に浸かる。

肩まで浸かると疲れが吹きとぶ。
「なぁクリス。ここは森の奥って言ってたけど、このお湯とかってどこから引いてるんだ？」
「お湯や水は引いてきてるんじゃなくて、魔道具を使ってるんだよ」
「魔道具？」
「そうだよ。この蛇口は、私の魔力を流してお湯や水が出るようになってるんだよ」
魔法きたー！
散々読んできたライトノベルの世界を体感して少し興奮してしまう。
「凄い！　魔法って何でも出せるの？」
「さすがに何もない状態から何かを出すのはできないよ。でも魔道具を介して炎を出したり水を出したりはできるよ」
「そうなんだ。でも、それだと俺が蛇口ひねっても水は出ない？」
「いや、魔道具には私の魔力を溜めているから、カオルが使っても大丈夫だよ」
それならば、クリスがいない時でも生活に支障はなさそうだな。
「さぁ、もうそろそろ上がろうか。のぼせちゃうよ」
クリスに促されて俺たちは風呂から上がる。
クリスは体を拭くところまで手伝いたがったので、タオルを奪い取って自分で体を拭いた。
着替えはクリスの服を借りたが、体格差があったので彼シャツみたいになってしまった。
「ごめんね、サイズがちょうどいいのがなくて……」

「いや全然いいよ。貸してくれてありがとう」
クリスは寝る前にリラックスできるようにと、カモミールの香りに近いハーブティーを淹れてくれる。
――あ～なんだかホッコリするなぁ……
至れり尽くせりでスタートした異世界生活に、最初の頃に抱えていた不安はどこへやら。
俺は友達の家に泊まりに来た感覚で布団に入り、すぐに寝てしまった。

窓から入り込む朝日で目が覚める。
起きたら元の世界に戻って……などいない。
残念な気持ちのままベッドから起き上がってリビングへと向かうと、ソファに座っているイケメン。
「おはようカオル」
朝から眩しいほどの笑顔を見せてくれるクリス。
「おはよう、クリス」
「昨日は眠れた？」
「うん。よく眠れたよ」
そう、本当によく眠れた。
異世界に来た不安や元の世界に戻れないかもしれない恐怖で眠れない夜を明かす予定だったが、

爆睡だ。
自分の神経の図太さがほんと嫌になる。
「安心したよ。じゃあ、改めて朝の挨拶をしないとな」
そう言って、クリスが近寄ってくる。
よく意味が分からずに突っ立っていると、クリスは俺の顎をクイッと上げ、顔を近づけてきた。
――……え？　えぇぇぇえ!?
キスされそうな雰囲気に慌てふためいてしまう。
「わ！　え？　クリス？　な、何するの？」
「え？　何って朝の挨拶だけど？」
「挨拶？　これ挨拶なの？」
「うん」
確かにヨーロッパとかではチークキスみたいなのがあるけど……この世界での挨拶ってキスなの？
「ごめん。俺の国じゃ、挨拶でこんなに顔を近づけないから、驚いちゃった」
「そうなんだ。この世界では、親しい人やお世話になった人とは、朝や寝る前の挨拶でキスするんだよ。それはマナーとして絶対なんだ。拒否したら失礼にあたるからね」
クリスはこの世界のマナーについて説明すると俺の唇に軽くキスしてくる。
迫りくるイケメンの顔と柔らかい唇の感触に、俺は顔を真っ赤に染めて固まる。

「ん？　カオルどうしたの？」
「ど、どうもしてない……です」
嘘です。
もう心臓バクバクです。だって、これが俺のファーストキスだから。
クリスは固まっている俺を見てクスっと笑い「ほら。朝ご飯にしよう」と頭をポンポンと撫でキッチンへと向かっていった。
朝食を済ませ、後片付けをしながら俺は今日から何をしていくのかクリスに確認していく。
「なぁ、クリス。俺は何をすればいい？　俺ができることなんて家事くらいなんだけど……」
「そうだねぇ……私も狩りに行く時以外は、ほとんど家にいるから一緒に畑の手伝いや、森に生えてるキノコや果物の採取を手伝ってくれればいいかな。でも森は危ないから一人で行ったらダメだよ！　後は……私の話し相手をしてくれたら嬉しいかな」
「分かった！　話し相手ならまかせてよ！」
俺がそう答えると、クリスは嬉しそうに笑ってくれる。
それからクリスと色々な話をした。
クリスの仕事はこの森を守る番人。
たまに森を荒らす奴がいるらしく、そんな奴らを取り締まったり森の状態を確認したりするらしい。
ずっと森の中で暮らしているわけではなく、交代でこの森の番人をしているらしい。

「でも一人で森の中にいるのって寂しくないのか？」
「んー……寂しいと思うこともあるけれど、一人の方が楽だからね。でも、今はカオルがいてくれると嬉しいし楽しいよ」
「そっか。よかった」
クリスに一人の方が楽と言われた時は、早く出ていかないといけないのかと思ってしまった。
口では楽しいと言ってくれているが、このままクリスに甘え続けるのはダメだなと思う。
だから、早く馬車が来てくれるといいんだけど……
それから話題は変わり、この世界のことをクリスから教わる。
文化は多少違うところもあったが、明らかに違うのが、この世界には男しかいないということ。
この世界にいる限り、俺の童貞は男の尻に捧げないといけないのかと思うと……さらに早く元の世界に戻りたくなる。
それに子供はどうやってできるんだ？　と、疑問に思ったが、なんだか怖くて聞けなかった。

それから時は過ぎ……クリスと同居して二週間が経った。
「クリス、おはよう」
「おはよう。ほら、カオル……もうそろそろできるでしょ？」
優しく微笑みながらクリスが俺の前に立ち、キスを待っている。この二週間の間にクリスから課せられた試練。

それは、俺からクリスに挨拶のキスをすること。
もし、このまま元の世界に戻れず、この世界で生きていくのなら挨拶のキスは必要なことだ。幸いクリスは、男でも綺麗な顔してるからまだマシだ。うん、きっと大丈夫。
俺は顔を真っ赤にしながら背伸びをしてクリスの唇へキスをする。
「こ、こんなんでいいのか？」
「うん、充分。じゃあ私からも」
クリスはそう言うと俺に優しくキスをしてくれる。
やっぱりキスが挨拶なんて慣れないが、クリスがとても満足そうな顔をしているから……まぁいいか。

そして、俺は、なんだかんだ異世界で穏やかな毎日を過ごしている。
クリスと一緒に森でキノコや果物を採取したり、家の隣にある畑を耕したり、パンを焼いたり、一緒にお茶したり。
今日も午前中は森で果物等を採取をし、午後からは畑仕事をして一日が終わった。
「はー！　今日もいい汗かいた！」
「カオルも畑仕事が上手になったね。ふふ。顔に泥がついてるよ」
クリスはそう言うと俺の顔を拭ってくれる。
「クリスありがとう」

――なんだか俺たちって兄弟みたいだな。
クリスは優しい兄貴。いや、こんなに顔面偏差値が離れているのに兄弟なんて言ったら失礼かもしれないけれど、一人っ子の俺は兄のように慕ってしまう。
畑仕事が終わり、家に戻るとクリスに声をかけられる。
「今日は先に風呂に入ろうか」
「あ、うん……」
クリスの問いかけに、歯切れ悪く返事をする。風呂には入りたいが、問題がある。今日はどう乗り越えようかと考えながらクリスに連れられ浴室へ。
服を脱がされれば、この世界の常識が俺に襲い掛かる。
「ん……ぁ、ぅ……じ、自分でできるから……」
「逃げちゃダメだよ、カオル」
『風呂には一緒に入って互いの体を洗い合う』
という謎の異世界ルールに、俺の下半身は限界を迎えていた。
クリスに背後から抱きしめられ、たっぷりの泡で綺麗に洗ってくれるのはとても嬉しい。嬉しいのだが……その洗い方がなんともねちっこい。
乳首を指の腹で優しくクルクルと洗われ、先端をキュッと摘まむように洗われるが……それが気持ちよすぎて、勃ち上がろうとする息子を抑えるのに必死だ。
勃ってるところを見られるなんて恥ずかしすぎて、クリスの腕から抜け出そうとするが、呆気な

く捕まってしまう。
「ダメだよ。まだ洗ってないとこがあるだろう？」
そう言われクリスの指先は、胸から腹へと落ちていき、下腹部へと向かう。
石鹸で俺の肌を滑っていく感覚がこそばゆくて腰が動く。
太ももの内側をやわやわと揉まれるように洗われると……完全に息子氏は勃ってしまった。
恥ずかしくて足で隠そうにも、クリスの腕が邪魔してくる。
「クリス……もぅ、いいから……」
「ん？　あぁ、カオル勃っちゃったんだね」
耳元で低く甘ったるい声で囁かれ、背中がゾクリとする。
「ご、ごめん。洗ってもらってるのに勃つなんて……」
恥ずかしすぎてもう泣きそうです。だからクリスさんもう許して下さいぃぃ……
半泣き顔でクリスの方を見上げるとクスッと笑われる。
「勃つのは仕方ないよ。勃ったら抜いてあげるのがマナーだから安心して」
「……へっ？」
クリスの言葉を理解できずにマヌケ顔を晒す。さっきまで俺の内太ももを撫でていた手は、俺のモノをやんわりと包み込み軽く上下に扱きだす。
「ひぁっ!?　あっ、ちょ、ちょっと……ダメだってぇぇ！」
――抜いてくれるマナーって何!?　この世界マジでどうかしてるぞ！　童貞の俺にはキャパオー

バー案件すぎるってぇぇ。
石鹸のおかげでにゅるにゅる感が増し、扱かれる感触が気持ちよすぎる。初めて人に触られたせいもあって、俺の息子は見事に完勃ち。というか、あと一分以内にイク自信あり。
「んぁ……ふぁ、もう……もう出、ちゃうから、クリス離してぇ……」
「カオル、可愛い。私の手でイッて……」
少し強く握られ、荒めに扱かれると俺の息子は早々と吐精してしまう。クリスの手は絞り出すように俺のモノをきゅっきゅっと優しく扱く。
それに応えるようにぴゅくぴゅくと最後まで出しきってしまった。
――うわぁ……抜いてもらっちゃったよ……
「カオル、大丈夫？」
クリスに顔を覗き込まれるが、罪悪感と羞恥心と興奮が入り混じる。クリスの顔などまともに見れず、俺は俯いたまま頷いた。
「じゃあ、泡を流そうか」
シャワーで丁寧に泡も流されて、俺の体は色んな意味でスッキリ綺麗だ。
だが、今度は俺がクリスの体も洗ってやらないと。そう考えていると、俺の腰辺りに何やら硬いモノがゴリッと当たる。
――……こ、この感じは……
クリスの方を見ると、興奮して頬を紅くした顔が目に入る。色っぽすぎるその表情に、思わず生

唾を飲む。
「カオルごめん。私も勃ってしまったみたいだ……」
そう言うとクリスは俺にキスをして、後ろから抱きしめる。ゴリゴリッと熱く猛ったクリスの息子様が腰辺りに押し付けられる。
――こ、こ、このキスは何のキスなんだ!?　いや、腰に当たってるモノっっ!!
どうすりゃいいんだとパニックになっていると、耳元に熱い吐息がかかる。
「カオル……私のも触ってほしい……」
「えぇっ!!　さ、触るって……そ、そうだよな……」
抜いてもらった分際で、クリスのお願いを断ることなんてできなくて小さく頷く。
これはあれだ。友達同士の抜き合いってやつだ。やったことないけど……
そう自分に言い聞かせ、ゆっくりとクリスの方へと振り向く。
チビの俺とクリスでは身長差が二十センチくらいあるだろうか。
目の前には鍛え抜かれた胸筋が。
そして目線を下に向ければ……Ｏｈ……
俺のとは比べようがない程立派なモノが目に入ってきた。
クリスのモノはとても立派だ。デカすぎて触れるのに躊躇してしまう。
もたもたしている俺に痺れを切らしたのか、クリスは俺の手を握って自分のモノへと誘導していく。

俺の手が触れればピクッと反応する。
意を決して指先で陰茎に触れると、ググッと反りが強くなっていく。
――気持ちいいのかな？
クリスにしてもらったように上下に扱いていくと、鈴口からぷくりと液体が出てくる。
俺はなんとも言えない恥ずかしさに思わずクリスを見上げると、蕩けた顔で俺の行為を見ていた。
上気した顔に少し荒い息遣いが聞こえる。
――うわぁ……めっちゃエロいな。
「クリス……気持ちいい？」
イケメンが俺の手で興奮しているかと思うと少しだけ優越感が出てきて、調子こいてクリスに尋ねる。
「うん、気持ちいいよ」
クリスの言葉に嬉しくなり、握っていたクリスのモノをキュッと強めに扱いてあげる。すると切なそうな顔をして俺にキスをしてくる。
普段は軽く唇に触れるだけのキスなのに、今は貪られるような深いキスだ。キスが終わるとクリスは物欲しそうな顔で俺を見つめてくる。その視線に興奮して、俺はさらに調子に乗ってしまう。
「ねぇクリス。もっと気持ちいいこと……してほしい？」
上から目線のドヤ顔で甘い言葉を吐いてみると、クリスは照れた顔で返事をくれる。
「してほしいな。カオル、舐めてくれるの？」

舐め……な、舐めるー!?
俺の予想を遥かに上回る返答に固まってしまう。
「な、舐めるのは……ちょっと……」
「そうなの？　この世界じゃ舐めるのなんて普通だよ？」
出たぞ。この世界のとんでも常識。
躊躇いながらクリスを見上げると、凄くしてほしそうな顔を見せる。
いやでもさすがに男のモノなんて舐められない……
「カオル……もっと気持ちいいことしてくれるんでしょ？」
俺が怖気付いているのが分かったのか、クリスは俺の頬を優しく撫でながら説得してくる。
――え、えぇ……どうしよう、どうしよう……
困惑する俺などお構いなしに、クリスは俺の手を引き浴槽のふちに腰掛け「ほら。これで舐めやすくなったでしょ？」と追い討ちをかけてくる。
押しに弱い俺は、気がつけば両膝をついてクリスのモノと対峙していた。
――グロい。グロいぞコレは……
目の前で拝見すると、色や形や浮き出る血管に圧倒される。再びクリスの陰茎に手を添え、覚悟を決めてゆっくりと顔を近づけるがどこを舐めたらいいのか分からない。恐る恐る舌を伸ばし亀頭部を舌先で舐め始めると、クリスは優しく俺の頭を撫でだす。
口の中に少し苦い、なんとも言えない味が広がる。

亀頭部を舐めながら陰茎を扱けば、どんどん硬さは増し張り詰めてくる。先端から陰茎の方へと舌を移動させクリスを見上げると、顔を真っ赤にして苦悶の表情を浮かべていた。
「こんな感じでいいのか？」
「うん、凄く……凄く気持ちいい。もうイキそう」
イキそうという言葉を聞いて、扱くスピードを上げて先端を舐めたり咥え込んでみる。
「ん、んむ……んっ……」
ぐちゅぐちゅと唾液と精液の混じった音が浴室に響き、なんだか俺も興奮する。
クリスも気持ちよさそうに腰を揺らし、甘い声が漏れてくる。それが嬉しくて俺は夢中で舐めたり扱いたりしていた。
口の中で亀頭部が膨らんできたと思った次の瞬間、クリスは俺の口から自分のモノを引き抜き俺の顔に射精した。
「んっ……あぁ!!　ご、ごめんカオル。顔にかけちゃった…」
たっぷりと熱い精液を顔や髪にかけられた俺を見てクリスは慌てふためいている。
――何やってんだよ俺……
顔中を青臭い匂いに包まれ、少し冷静になる。
その日は、満足げなクリスに抱きかかえられながら湯舟に入り、お休みのキスをして就寝した。
それからの日々は、朝起きてキスをして、家事をして、畑仕事や森で採取して、汗水垂らして働いた後はお風呂に入って抜き抜かれ。そして、就寝前のキスをして眠りにつく。

そんな日々を過ごしていたら、あっという間に二か月が経ってしまった。
今日も昼食を済ませてクリスとソファでまったりと過ごす。
ソファで横になり、いつの間にか定位置になったクリスの膝の上に頭を乗せて微睡(まどろ)んでいると、父さんの顔が浮かんできた。
――父さん心配してんだろな……
この世界での生活も慣れて余裕が出てくると、日本にいる父さんのことを考える時間が増えてくる。俺は行方不明ってことになってるんだろうから、きっと父さんも心配している。
母を病気で亡くし、一人っ子の俺までいなくなったら、父さんはどれだけ落ち込んでいるだろうか……
「なぁクリス。俺が来てもう二か月が経つだろ……」
「もう、そんなに経つんだね」
「だから……もうそろそろ日本に帰る手がかりを探しに村や町へ行きたいんだけど、やっぱり馬車を待つしかないのかな？」
「……」
「……クリス？」
俺の不安をぶつけてしまうと、クリスは黙っていつもの優しい表情が消える。今までに見たことないクリスの様子に俺は戸惑ってしまう。

「カオル。前にも言ったけれど、ここから村までは歩いて行ける距離ではないし、森には危険な場所もある。馬車は、いつ来るか分からないと言っただろ？」
「そうだけどさ、他の馬車とか来る予定ないの？　クリスも交代で森の番人をしているんだろう？」
「番人の交代時期が二年後にあるから、その時に交代の番人を乗せた馬車が来るかな」
「二年……」
あと二年以上も待たせなくてはいけないと思うと、父さんの悲しんでいる顔が浮かぶ。
「……父さんに会いたい。早く馬車が来てほしい」
「そうだね……会いたいよね。でも、馬車が来ないと村にも行けないから一緒に我慢しよう。な？」
「うん……わがまま言ってごめんな」
「いいんだよカオル。私がそばにいるから、カオルが寂しくないように、ずっとずっとそばにいるから……」
優しい言葉に目頭が熱くなり、クリスの膝に顔を埋める。
クリスは泣き虫な俺を嫌な顔せず慰めてくれる。クリスは何も悪くないのにわがまま言って困らせてしまった。
こんなにも俺を大事にしてくれているのに。クリスに迷惑をかけてはいけないのに……
そう思いながらもクリスに甘えてしまう自分が少し嫌になったが、この世界ではクリス以外に頼れる人はいない。
日本に帰れない不安と父さんに会えない寂しさをクリスは理解してくれ、俺を強く抱きしめてく

れる。
「カオル、いつでも私を頼ってくれていいからね」
「ぐすっ……どうしてクリスはそんなに優しいんだ？」
「どうしてって……カオルのことが大好きだからだよ」
イケメンからの突然の大好き発言にドキリとしてしまう。クリスを見上げると、少し照れた表情を浮かべ俺を見つめ返してくる。キスや下半身の触り合いもした仲なのに、大好きなんて言葉くらいでドキドキしてしまうなんて……
クリスの言葉に照れて俯くと、顎をくいっと持ち上げられる。
「ねえ、カオルは私のことは好き？　それとも……嫌い？」
「えっ!?　そりゃあ……好き、だよ」
雰囲気に飲まれて初めて家族以外の人に好きなんて言ってしまい、恥ずかしさのあまり顔が熱くなる。クリスは俺の返答に満足したのか、嬉しそうに微笑んでキスしてくる。
まるで恋人にでもなったかのように喜ぶクリスの反応が可愛い。もしも、俺が女の子だったら顔がよくて、優しくて、無邪気な男性にこんな反応されたらイチコロだろうなと思った。

そしてまた、変わらぬ日々が過ぎていく。
クリスは狩りに行き、俺は留守番をする。
いつものように暇だな～と思っていると、以前散策した時に紅茶に入れると美味い果実がなっていたことを思い出した。
――クリスが帰ってきた時に出す紅茶にその果実を入れてやったら喜ぶかも！
俺は一人で森へと向かった。
そう言えばクリスに一人で森に行くなと言われたけれど……まぁ、何度も行っている場所だし大丈夫だろう。
「お、あったあった！」
目的の果実を見つけて帰ろうとした時、森の奥からガサッと音が聞こえる。
動物かな？　と、思って見つめていると影は大きくなり、やがて人型になっていく。
「え？　人……？」
驚いて目を凝らして確認すると、ふくよかな体型の青年が籠を持って歩いている。
人がいるということは馬車が近くを通っているのかもしれない。そう思うと、居ても立っても居られず、青年の方へと駆け寄って声をかけた。
「あ、あの。すみません！」
青年は俺の声に驚いた様子で振り向いた。
「お兄さん、どこから来たんですか？　もしかして、馬車が近くに来てますか？」
「こ、こんにちは。馬車？　いや、僕はこの近くの村から来たんだよ」
村と聞いて俺は興奮してしまう。
「村は、この近くにあるんですか？」

「あぁ、小さな村だけど、ここから歩いて三十分くらいのところだよ」
クリスも知らない村があったのだ。喜びを隠しきれずにいると、青年から話しかけられる。
「ところで君はどうしてこんなところに？　森の中で迷ったの？」
「いえ、俺はこの近くの家に住まわせてもらってるんです」
「え、家……？　この森の？」
俺の言葉に青年の顔はみるみる青くなる。
どうしたんだろう？　と心配して近づいていくと、背後からクリスの声が響く。
「カオル!!　……離れるんだ！」
今まで聞いたことのない怒鳴り声に、俺も青年も驚いてしまう。後ろを振り向くと、息を荒げた恐ろしい形相のクリスが立っていた。
青年はクリスの姿を見てさらに顔を青くする。
「クリス、どうしたんだ？　なんで怒ってるんだよ」
「……いいから、早く小屋に戻ろう」
クリスは顔を伏せながら俺に近寄り、腕を掴んで早足で歩き出す。
青年の方を振り返れば、顔を青くし突っ立ったまま俺たちのことを茫然と見ていた。
「クリス、あの人体調が悪そう……。痛っ……クリス！　痛いって、クリス！」
家に着くまでクリスは俺を無視したまま歩き続ける。クリスの歩くスピードについていけず、何度か転びそうになりながら、ようやく家に到着した。中に入ると握っていた手をやっと離してくれる。

握られた手首は赤くなり少し痛い。
問いかけても答えてくれないクリスの無茶苦茶な態度に、苛立って睨みつける。
「クリス、なんでそんなに怒ってるんだよ！」
「森の中は危ないって言っただろ。ダメだよ、一人で出て行ったら」
「それは……ごめん。でも何度も行ったことあるから大丈夫かなって思ったんだよ。森に行ったくらいでこんなに怒ってるのか？」
「……」
何も言わずに口をつぐんだままのクリスは、何か隠しているように見えた。
「なぁ、さっき一緒にいた人が、近くに村があるって言ってたんだ。俺……その村に行ってみたい」
「……なんで？」
「なんでって……少しでもこの世界のことを知りたいし、日本に帰る手がかりが欲しい。クリスも分かってくれたじゃん」
「そんなにここから出ていきたいの？」
「出ていきたいとかそういう訳じゃないって！　このままずっとクリスに迷惑かけられないと思ってるんだよ」
「そうか……私から離れたいんだな」
「だから、違うって……」
クリスは話が通じないし、何を考えているのか分からない。このままじゃ同じようなことを言い

合って尚更仲が悪くなるだけだ。
こういう時は少し時間を置いて互いに冷静になった方がいい。
「ごめん、俺……少し頭冷やしてくる」
クリスのそばから離れ、ドアに手をかけようとした時だった。背後からクリスに抱きしめられる。
「ダメだ……出て行ったら、ダメ」
「なんでだよ」
「どうしてもダメ……」
「理由を教えてくれないと分かんないって。お互い少し冷静になった方がいいよ。だから、離してくれ」
「カオル、なんで私から離れようと……あ。そうか、あの青年のところに行くんだね」
クリスはそう言うと抱きしめている腕の力を一層強くする。
「はぁ？　なんでそうなるんだよ。なぁ、痛いよ」
「行かせない。絶対に……絶対に行かせない。カオルはずっと、ずっと、ずっと私と一緒にここにいるんだ」
クリスはそう言うと酷く怯えたような顔をしながら玄関の戸棚を開け、何かを探し始める。
「クリス……何してるんだよ」
豹変したクリスが怖くて動けずにいると、棚から何かを手に取り俺の方へと向かってくる。
「な、なんだよその首輪と鎖……なぁ、クリス怖いって……嫌だ！　クリス！　嫌だって！　離

せっっ！」
クリスに腕を掴まれ、リビングの隣にある寝室へと引きずられるように連れていかれる。
俺をベッドの上に押し倒すと馬乗りになり、首に太い首輪をはめられる。そして、首輪は鎖で繋がれ、ベッドの柵に固定されると鍵をかけられた。
俺はクリスの常軌を逸した行動を震えながら見ることしかできなかった。
「なぁ、クリス……こんなの冗談だろ？　早く外してくれよ」
「外さない。カオルはここでずっと一緒に暮らすんだ」
クリスの顔からは表情が消え、冷えた金色の瞳が俺を見下ろしていた。

◇◇
～クリス Side～

私のいる世界は呪いにかかっている。
外見至上主義のこの国は容姿のよい者が優遇され、そうでない者は不当に扱われる。
こんな社会になってしまったのは、はるか昔に民から『醜い』と言われた初代の王が誕生してからだと、父に教えられた。
己の外見に強い劣等感を抱いた王は、自分よりも美しい者たちを排除し、顔を隠すように仮面を付けさせた。

そして、王が示すものが『美』なのだと民を洗脳し、美醜に対する差別的な呪いをかけ続ける。
王と同じく醜いと言われていた者たちは、仕事や地位が優遇される。最初は王の政策に異常さを感じている者もいたが、段々と慣れてそれが普通になってくる。
結果、行きすぎた政策によって美醜に対する差別は激化し、現在の美醜の概念となった。
私が第一王子として生まれた時には、醜い外見というだけで周りからでき損ないのレッテルを貼られるのだ。
父に似た、醜い顔と体。
母は私に沢山の愛情を注いでくれ、父も自分と似た顔で生まれた私の苦しみを理解してくれた。
将来国を統治する者として、勉学に剣にと両親は様々なことを教えてくれた。
父と母という理解者がいてくれることはとても心強かった。だが、友達と呼べる者は一人もいない。
従者たちも表情や態度に出さないようにしているが、私を見る目には恐怖と嫌悪感が浮かんでいた。
『王の息子』だから致し方なく私と接する周りの態度に、幼い頃からずっと心を痛めた。
王宮内での生活に嫌気が差したが、外の世界はさらに偏見が酷く、一歩外に出れば私のような者は仮面で顔を隠さなければならない。
顔を隠すのは嫌悪を抱かれるだけでなく、恐れられるからだ。
差別され続け日陰で生きるようになった醜き者たちはその後、得体の知れぬ者として恐怖の対象となり、人々の意識に植え続けられていった。民を不快にしてはならないと、王である父でさえも

民衆の前に姿を見せる時は仮面を付けている。嫌悪と恐怖が入り混じる化物のような存在になった醜き者たちは、表舞台から徐々に姿を消していった。
初代王が亡くなったあと、我が国の国力は低下する一方だった。新たに貴族となり力を得た美しき者たちは国を動かす力もなければ、国を思う気持ちもない。長きにわたる悪政で国内は荒れ、国力が落ちていく。他国による侵略の影がちらつき出し、今のままでは国を守ることはできないと一部の者は理解し、多少なりとも外見による差別は減っていった。
だが、力を持った貴族たちの横暴で独善的な考えは変わらなかった。地位が高い者になればなるほどその傾向が強く、容姿だけにこだわり、民のことなど考えない貴族が私は嫌いでならなかった。
考え方が違う貴族たちとは意見が合わず、政策でもぶつかることが多かった。それ故に、父や私の存在を邪魔だと思っている輩もいる。
そんな殺伐とした私の世界だったが、弟の誕生により変化する。
三つ下の弟ウィリアムは全てが愛らしく、こんな私を見ても嫌な顔をせずにとても懐いてくれた。美しく心の清らかなウィリアムの隣にいると、自分の醜さなど忘れられた。
しかし、ウィリアムが生まれたことで、醜き兄が王位継承一位なのが納得いかないと、陰で騒ぐ者たちが増えていった。
ウィリアムはどんどん麗(うるわ)しく成長し、私は逆に醜悪になっていく。
王位継承のことで派閥ができてしまうと、ウィリアムと私の間に見えない溝ができた。ウィリアムは『兄こそ次の王にふさわしい器を持っている』と言ってくれるが、やはり周りは納得しなかった。

人間の裏の顔や醜い部分が見え隠れする生活に、私の精神はどんどんすり減って限界を迎えていた。

そんな時にハルという世話係と出会った。

ハルは騎士団長レオンの妻で、とても美しい容姿をしていた。そんなハルは、私の外見に嫌悪感も見せずに優しく接してくれる。家族以外の者の純粋な優しさに触れ、いつしか私はハルに心を開くようになった。

穏やかで幸せな生活が続くのだと思った矢先に、事件は起きた。

私の十五歳を祝う誕生の席で、食事に毒が盛られたのだ。目の前で毒味係が苦しみのたうち回る姿に、私は大きなショックを受けた。

食事を取ることを恐れてしまい、心も体も弱っていく日々。

そんな時、ハルが一時的に騎士団長レオンの所有する別邸で療養してはどうかと父に提案してくれた。父はそれを了承し、私は王宮を離れることとなった。

レオンの別邸はバリスの森の奥深くにあった。転移魔法を使い、その森へと向かう。

緑豊かな森。誰の視線も気にせず、悪意に満ちた世界から離れ、仮面を外して生活する喜びは計り知れなかった。

私とハルはそこで一緒に暮らし始めた。

ハルには沢山のことを教えてもらった。畑仕事や森での野草採取をしたり、レオンが来た時には狩りを教えてもらった。

ハルが作る手料理はとても美味しく、食事への恐怖も克服していった。

そんな生活が数か月ほど経ち、ある晩ハルは秘密の話をしてくれた。

ハルは元々この世界の人間ではなく、違う世界『ニホン』から来たという。

このバリスの森に迷い込み、レオンに助けられ、恋をした。ハルのいた国では、レオンや私のような見た目の者は美しいと言われていたという。外見による多少の差別はあるものの、その人の生き様や内面を見る人も多く、この国とは違う価値観に、ハルのいた世界に憧れを抱いた。

そんな世界があるのだと分かると、尚更自分がいる国や世界について理不尽に感じる。

いつも醜いと距離を置かれ、蔑まれる自分を真っ直ぐ見てくれる人など本当に現れるのか。不安になっていると、ハルはそっと手を握ってくれる。

「いつかきっとクリス王子のことを見た目だけでなく中身も含めて愛してくれる人が現れますよ」

ハルが言ってくれた言葉は深く私の記憶に残った。

それから徐々に体調は戻り、王宮に戻ると以前よりも公務に励むようになった。

周りから外見に関してなんと言われようと、仕事で成果を出すようになれば、少しずつだが私にも味方は増えた。

それから七年が経ち、レオンがあの別邸を私に譲ってくれた。心が休まる場所だが、王都からも遠く警備が手薄になるため、森の周囲を結界で囲み誰も入れないようにした。

そして、森の中を散策する時は、ついハルとレオンが出会った場所に出向いてしまう。

原っぱの真ん中で佇み、空を見上げていつも思う。

——いつか私のことを恐れず、愛してくれる人に出会えますように。
そして、その願いが叶う日がやってきた。
カオルとの出会いは突然で、あまりの可愛さに見つめるだけで声もかけられなかった。
拒否されるのが怖かったのだ。
だが、カオルはこんな私に声をかけてくれた。私を見つめる目には嫌悪感や恐怖もない。ただ真っ直ぐに見つめてくれる。
——ハルと同じ目だ……
真っ黒でつぶらな瞳に私は心を奪われる。
別邸へ案内して話を聞くと、カオルもハルと同じく『ニホン』から来たという。
人懐っこい笑顔を見せ、私が触れても嫌な顔もしない。カオルはとても可愛いく、私は一目惚れをしてしまった。
そして、この世界に迷い込んで不安な様子のカオルを見て、私の中によからぬ考えが湧いてくる。
——このままカオルをここに閉じ込めてしまいたい。
この世界のことを何も知らない、私以外に頼る者もいないカオルは、私だけのモノだと思った。
カオルに来るはずのない馬車の話をして引き留め、森は危ないから歩いて出られないと嘘をつき、ここにとどまるようにした。
カオルをここから離れられないようにすると、さらなる欲求が生まれてくる。
カオルに触れたい、キスがしたい。

その思いが止めどなく溢れ、挨拶はキスだの、風呂は一緒に入り体を洗い合うだの、私の都合のいい嘘を次々についてしまう。
私の嘘を疑うことなく受け入れてくれるカオルに危うさを感じるが、そこがまた可愛い。
申し訳ないなと思うが、どうせカオルをここから出すつもりはないので嘘がバレることはない。
カオルの柔らかな唇、白くきめ細やかで美しい肌、体は同じ男性とは思えない程に細く華奢だ。
全てがたまらなかった。
私の手でカオルに快楽を与えられることに喜び、私のモノを恥ずかしげに触れ、口に含む姿を見た時は夢かと思った。
それから二人で過ごす生活は穏やかで、幸せに溢れていた。
しかし、幸せは長くは続かなかった。
この森に張っていた結界の一部が消え、近くの村に住む青年とカオルが出会ってしまった。
その青年は仮面をつけておらず、とても美しい見た目をしていた。
二人は楽しそうに話をしている。そして、カオルが少しずつ青年に近づいて行く。
——ダメだ。カオル、行ってはダメだ。
「カオル!!　離れるんだ！」
気が付けば大声を出し、二人の前に飛び出していた。家に戻ろうとカオルに伝えるが、青年のことばかり心配していた。
私はカオルの言葉に腹が立ち、嫌がるカオルの手を引き家まで連れて帰る。誤解を解きたかった

が焦っていたせいか上手くカオルへの思いが伝えられなかった。
そして、カオルは村へ行きたいと言い出し、家を出ようとした。
――村に行ってあの青年に会いに行くのか？　やはりあのような容姿が整った者がいいのか？
カオルの心があの青年に傾いてしまっているのならば体だけでもいい。閉じ込めて他の男のことなど考えられないようにすればいいだけだ。
私の頭の中はカオルを繋ぎ止めることでいっぱいになった。
戸棚に置いていた獣を繋ぐ首輪と鎖の魔道具を手に取り、カオルの方へと向かう。
首輪と鎖を持った私を見つめるカオルの瞳は恐怖で揺れている。
カオルが嫌だと叫ぶが、その言葉にむしろ興奮を覚えてしまう。それほどに私の精神はカオルに依存し狂ってしまっていた。
ごめんね、カオル。
でも、こうするしかカオルを繋ぎ止める方法が思いつかないんだ。

◇◇

クリスに監禁された。
首輪を外してくれと、どれだけ懇願してもダメだった。閉じ込められた俺に対して、クリスは何事もなかったかのように普段通りに接してくる。

あまりにおかしな様子にクリスを見つめると、瞳から光が消えているのに気付く。クリスは何に対して絶望し、俺にこんなことをするのだろう。
そう考えていると、クリスは外行きの服に着替えて声をかけてくる。
「少し出てくるから、いい子で待っててね」
そう言って俺を一人部屋に残し、クリスは出ていった。クリスの姿が見えなくなるとすぐに首輪を外そうと試みるが外せない。
見た目は普通の首輪と同じだが、もしかしたら特殊な魔道具なのかもしれない。
「なんでクリスは俺にこんなことするんだろ……」
俺を監禁する理由がまったくもって分からない。ずっと優しくしてくれていたのに。
理由を考えてみるが答えは出ずにあらぬ方向に妄想が膨らんでしまう。

妄想①　クリスは殺人鬼で森に迷い込んだ人をこの家に招き入れて次々に……
妄想②　実はクリスはサイコなマッドサイエンティストで俺は実験体にされて……

「あわわわわわ……」
今まで見たホラー映画のシーンが頭をよぎり、妄想は悪い方にどんどん膨らんでいく。
本気でどうにかして脱出しなければと考えているとクリスが戻ってきた。ベッドの上で妄想に怯え、頭を抱えている俺を少し不思議そうに見てくる。

「カオル、いい子に待っていたね。食事を持ってきたよ」
クリスはそう言うとベッドの横の机に食事を置いてくれる。こんな状況だが腹は減っている。でも食べる前に確認しておきたい。
俺は意を決してさっきの妄想をクリスにぶつける。
「なぁ、クリス……俺を殺すのか？」
「え？　なんで私がカオルを殺すの？」
大真面目な顔でアホみたいな質問をクリスにすると、若干引いた表情を見せながら答えてくれる。
いや待て。なんで監禁するような奴に引かれないといけないんだよ。
「じゃあ、俺の体で実験とかするの？」
「はは。何それ、カオルは面白いことを言うね」
あ、違うんだ。
妄想通りにならなくてよかったと少しホッとする。まぁ、よくよく考えてみれば、そんなつもりならとっくに殺されるか実験されてるよな。
「じゃあ、なんで首輪を付けるんだよ」
「カオルがここから出ていかないようにするためだよ。帰ったらカオルが家にいなくて、とても心配したんだから」
俺は首輪を掴み外してくれとアピールするが、クリスは優しく微笑みながら「だーめ」と言ってくる。

「俺が一人で森に行ったのは、美味しい果物を採ってきて、クリスと楽しいお茶会を開こうと思ったんだ」
「そうだったんだね」
「分かってくれた？　もう一人で出歩かない。約束する。だからこれ外してくれよ……」
鎖を持ち上げるとジャラリと重たい音が鳴る。クリスは微笑みを浮かべたまま俺を見つめるが、その微笑みがなんだか怖い。
クリスが首輪に触れながら口を開く。
「それはできないかな」
「なんでダメなの？　お願い、お願いだから……」
目尻に涙を溜めてお願いすると、クリスは少し困った顔をしてため息をつく。
「じゃあ、私の願いも聞いてくれる？」
これを外してくれるならどんな願い事だって聞いてやるぞ！　でも、クリスの願い事って？　まさか、痛いこととか怖いことじゃないよな……
そう思いながらも、クリスの願いを聞く以外の選択肢がないため俺は頷く。
「うん、いいよ！　でも、痛いのとか怖いのは嫌だぞ」
「そんなんじゃないよ」
クリスは俺がいるベッドへ腰を下ろし、不気味な笑みを浮かべる。
――うっ、その笑顔は……凄く嫌な感じがする。

じっとりと熱を持った瞳に見つめられて思わず後ず退ると、腰をぐっとつかまれて引き寄せられる。
「私の願いは、カオルに私の子を孕んで欲しいんだ」
クリスは愛おしそうに下腹部を撫でてくる。触れられた瞬間、背中がぞわりとした。
「孕む……？」
「そうだよ。ダメ？」
ダメ？　と聞かれても……チョットイミガワカラナイデス。
『孕む』なんてワードはエロ本でしか見たことないぞ。それに男の俺が孕むとか……普通に考えて無理だろ。男は妊娠できないんだから。俺が妊娠だなんて……無理無理無理!!
「ハハ、冗談キツいって。男の俺が孕むなんてできないの分かってるだろ？」
「ん？　あぁ～そういえばニホンは男性以外の性別もあるんだったね。大丈夫、ここの世界は男でも孕むことができるから」
「……へ？」
マヌケ面の俺の頬を愛おしそうに撫でながら優しくキスをしてベッドに押し倒し、クリスが覆いかぶさってくる。
「私も我慢の限界だし、どっちにしてもカオルは孕んじゃうかなぁ」
俺を見つめるクリスの瞳はさっきよりもギラつき興奮していて……これはマヂでヤバイ。
「クリス！　待て！　ほら、ほらほらよ～く見て、俺の顔はこんなんだぞ。こんな顔の男を犯しても何もいいことないし、楽しくないぞ！」
両手でクリスの顔を掴んでしっかりと確認させる。クリスはじっと俺の顔を見てふにゃりと笑う。
「カオルはやっぱり可愛いよ」
そして濃厚なキスをされた。
――えぇぇぇー!?　俺が可愛いとかおかしいだろ！　何か変な薬でもやってんのかよ！
口の中をぐっちゃぐちゃに貪られ、舌も吸われて流れ込んでくる唾液に溺れて窒息しかける。俺はクリスの背中をバシバシと叩きギブアップだと伝える。
「ハァハァ、ハァハァ……し、死ぬ……」
「ごめん……夢中になってしまった」
クリスは謝るが反省した様子はなく、口角から垂れる俺の唾液を舐め取ってまたキスをしてくる。
今度はさっきよりも優しく口の中を愛撫するように舌で犯される。舌を絡め取られ甘噛みされて、嫌なはずなのに、クリスの甘いキスに俺の愚息は素直に反応しだしている。
「ん……ふっ、ぁ、やら……」
互いの唾液が混じり合い卑猥な音が響く。そこに追加でクリスの荒いイケボな吐息が混じり変な気持ちになってしまう。
――うぅ、耳が犯されてゆくぅぅ。
相手は男だと自分に言い聞かせるが、何せクリスは顔がすこぶるイイ。男でも惚れてしまうくらいにイイ。

立ち読みサンプルはここまで